



Title	国家を生きる社会－西ケニア・イスハの氏族
Author(s)	中林, 伸浩
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39355
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 なか 中 ばやし 林 のぶ 伸 ひろ 浩

博士の専攻分野の名称 博 士（人間科学）

学 位 記 番 号 第 1 1 9 3 4 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 7 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 **国家を生きる社会**
－西ケニア・イスハの氏族

論 文 審 査 委 員 （主査）
 教 授 青 木 保

（副査）
 教 授 厚 東 洋 輔 助 教 授 梶 原 景 昭

論 文 内 容 の 要 旨

この論文が対象にしたイスハは、西ケニアに位置するイスハ人とよばれる人口約8万人のバンツー系の民族（ないしエスニック・グループ）が構成する社会である。現在のイスハは、19世紀末から植民地時代、1963年以降の独立時代を経て、根本的な変化をうけている。すなわちそれは、近代のケニア国家とそれとともなった社会的、経済的な諸制度によってイスハ社会が包摂される状況である。それは、国家規模の政治的な過程の一部であるが、イスハ人にとっては生活のすみずみにまで影響するきわめて日常的な過程でもある。

こうした植民地時代以降の社会変化は、アフリカではあらゆる場所で起きたことがらであるが、その過程は必ずしも一様ではない。植民地時代に政府の強力な政治的、あるいは軍事的な介入をうけた所や、急速な資本主義的な鉱業や農業開発のために住民が出稼ぎ労働者（プロレタリア）化した所がある。こういう場所では、伝統的な社会は外部の急激な圧力によって崩壊する傾向にあるが、イスハの社会変化はそれとは違う。植民地統治の圧力はより間接的だったために、イスハ人は新たに導入された諸制度に対して社会的、政治的、宗教的に積極的に応答をする余裕があった。このように、伝統的な文化と植民地行政が一定のバランスをもって、相互に刺激しながら変化した社会はアフリカでは決して珍しくはないが、そうした変化の過程を検討することは人類学的にも興味深い。無頭制社会（王制や首長制をもたない平等主義的社会）が国家という集権的な政治的制度のなかに取り込まれるという、かつて人類の歴史で広範に起きたことがらが、イスハにおけるこの100年間に起きているととらえることができるからである。単なる「動態」の研究ではなく、こうした人類史的なパースペクティブをもった研究は、現在の人類学のひとつの大きな課題である。

この過程はそれまで存在しなかった政治的（行政的）な首長の導入で始まった。その際、イスハ人は彼らの基本的な政治的単位であった氏族制度をもって対応したのだが、この無頭制なイスハの氏族は、その原則に合わない首長制を単純に拒否はしなかった。逆に、その間で互いに激しく競合する伝統的な政治的行動のパターンでもって、この首長の座を争いあった。そして、取り入れられた首長は昔の戦士リーダーになぞらえるなど、氏族制にまつわるさまざまな理念によって理解されたり、修飾されたのであった。この理念がとくに政治に関与しているという意味で、それをイデオロギーとよべば、イスハの行政首長制は氏族制のイデオロギーによって正当化され、受け入れられたといえる。包摂の過程は新たな政治的な理念的の構築が活発な過程なのである。

イスハ人の民族意識が政治的な意味をもって強化されたことも顕著な事実である。イスハ人がケニア国民の一部と

して統合されたとき、イスハ人の民族意識が強化されたというのは逆説的であるが、しかしこのふたつの事柄はイスハでみるかぎり不可分の関係にあった。というのは、植民地時代以前にはイスハ人全体を統合する政治組織はなく、植民地時代以降の地方行政制度の導入、特に行政首長制の導入とともにイスハ人の民族全体の結合は、初めて進んだからである。ケニア内の他民族との競合の結果、新しい政治制度はイスハ人という民族性と相互の自己規定の関係にあった。

政治や行政の領域だけでなく、生産や経済の領域でも、イスハ人は氏族制を変化への対応の枠組みとした。資本主義的な貨幣経済、商品経済が進行したにもかかわらず、イスハで土地の集積が進まなかったのは大きな特徴である。その理由は、土地すなわち耕作地が人口の増加とともに分割されていく際、氏族内の分岐に応じて土地の細分化を行うような、土地の集積を排除するような力がはたらいたことだと考えられる。他方、かつてのような移住も容易でなくなり、さらに土地登記制度が導入されることで、氏族・リネージ制は土地の個人所有のありかたと不可分の関係が生まれ、その実体は変質しはじめた。

氏族の本来の理念が実体を離れて新しい制度を生みだしたことは、現代イスハで極度に繁栄している各種の「組合」にみることができる。これらの組合はもっぱら葬式や共同労働やパーティーなどにおける金銭の管理にその機能があるのだが、その多くが氏族や近隣の相互扶助の理念を組織のベースにしているところに特徴がある。これまでの自給的現物経済とはまったく異なった現金経済は、個人や世帯の能力や裁量に依存するところが大きく、生まれによって自動的にきまる氏族のメンバーシップを媒介にした一律の賦金方式はトラブルのもとになる。つまり、この点で本来の氏族制度はすでによく機能しないのである。それに代わって自発的参加を原則とする組合によって、部分的ではあるが、コントロールを行おうとする試みである。このような経済的側面からみると、氏族の実質的な組合化ともいえるべき過程が進行していることがわかる。

イスハにおける儀礼的、宗教的な変化もまた大いに政治的な含意がある。この領域での変化を促した最大の要因は欧米からのキリスト教（フレンズ派とカトリック）の布教である。名目的なクリスチャンをいれると、現在ではイスハ人のほとんどがいずれかの教会に属している。キリスト教はイスハの伝統的な儀礼を、異教的という理由で抑圧した結果、その大部分が姿を消すか、大幅に形を変えた。例外がシレンベとよばれるかつて戦士であった長老の葬儀である。これは、戦士の勇敢さを象徴する雄牛どうしを闘わせる儀礼を含む劇的な葬儀で、他の一般的な葬儀と異なり、キリスト教的な粉飾がまったくない点で特異である。イスハ人があえてシレンベの伝統に執着するのは、思うに、かつての戦士がもっていた氏族の枠をこえた社会的リーダーシップの今日的な重要性が背後にあるからである。現在の行政首長がかつての戦士のイメージに重ねられて受容された事情を考えあわせると、戦士の葬儀にとくに伝統を再生させる意味がわかる。シレンベの細部を検討すると、それが単なる伝統の延長ではなく、伝統の政治的な操作であることが明瞭になるのである。

呪詛や呪術の力による氏族の長老政治もまた、国家による包摂の過程で独特の変質をとげた。これはアフリカにおける伝統的な儀礼的権力と世俗的な権力の、包摂時における葛藤という一般的な問題の一例でもある。イスハに行政首長制が導入されたとき、長老の権力は次第に浸食され、家族的領域に限定される方向に押し込まれた。行政首長の公的権力と長老の儀礼的権力の対照、前者のオープンな公正さと後者の呪詛や呪術という私的な不公平さという対立の図式が進展した。イスハ人の生活における日常的な葛藤も、多くはこのふたつの権力の領域に関係し、ときには両者の権力の実際の対立に巻き込まれる。しかし他方、長老たちは行政首長の下にいる無給の村役と、ルヒアとよぶ村中の裁判（近隣裁判）で協力する場ももっている。

一般にアフリカの氏族は各々ひとまとまりではなく、小単位で分散して分布しているのが普通だが、イスハ人の各氏族ははっきりした領地をもって住みわけている。それだけ、人々の日常生活のすみずみまで氏族の原理が浸透しているのである。これがイスハの近代化において、一方で国家的な諸制度の導入、他方で氏族にまつわる諸制度の応答という両極化が明瞭に目にみえる状況を生んだと思われる。この状況から結論として次のようなことが考えられる。イスハにおいては、無頭制、平等主義的政治体制に国家的な集権制が導入されたとき、それは単に政治、行政的なものだけではなく、経済や産業や交通から、宗教、教育、イデオロギーにいたる、新奇でトータルな事象との対決があった。それらに対する初期の抵抗の時期をすぎると、イスハ人はそれらを受容せざるを得ない状況、あるいは場合によっては、進んで受容する状況に入った。

このとき彼らが手掛かりにしたのが、イスハ社会の枠組みとイスハ人の行動の基準になっている氏族制だった。分岐の原理にしたがった土地細分化は、一部の人びとによる土地集積を妨げる点で、階層分化の進行をおしとどめる働きがある。氏族の組合化の現象は、貨幣経済の個人主義的傾向が血縁や近隣の親密な関係が破壊されないための手段と考えられる。無給の役人と氏族の長老たちの合議の場であるルヒアは、国家や地方政府の指導と圧力の緩衝帯になっている。これらは、どちらかといえば防禦的な側面であるが、これに対し、行政首長制の受容とその権力の正当化やイスハの民族的意識の増大は、氏族のイデオロギーの積極的な拡大であった。

このように、アフリカ農村部の一隅を占めるにすぎないイスハ社会でも、植民地時代から独立時代をつうじて国家による政策、国家的な規模の社会経済的な変動に、壊されたり、ただ呑みこまれるのではなく、自らの制度と理念を刷新して対応する過程がある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、西ケニアのイスハ人社会における長期的かつ集中的な分化人類学的研究の成果である。

本論文の目的は、イスハ社会の社会変化をフィールドワークによって克明に辿り、イスハ社会に独特な変化への適応の実態を明らかにするところにある。イスハ社会は19世紀以来の植民地化の経験と1963年の独立後における近代ケニア国家の形成による2つの大きな変化の過程を経てきた。これは植民地と新興国家という2つの「重圧」の下で社会が解体される危険性をはらむ体験である。伝統的なイスハ社会は、いわゆる「無頭社会」に他ならず、王や首長を欠く平等主義社会であった。それが集権的な政治制度をもつ国家の中に統合されるという状況に直面したわけであるが、イスハ社会は彼らの社会の基本的な政治単位である氏族制度をもって対応し、政治的・行政的首長制の導入を果たす。

本論文ではイスハのような小規模の「部族社会」が歴史の変化の中で近代国家の機能の中に取り込まれるとともに自らの自立性を維持するために伝統的な枠組みを変化に適応させて用い、それに成功する状態が生き生きと記述され分析されている。とくに包摂という概念を用いてこの過程をとらえている点はこの研究の大変ユニークなところであり、しかも文化人類学的研究としても大きな貢献をなすものである。氏族制度をいかに巧みに変化させながら新しい状況に適応してゆくかは、組合の活動にも見いだされる。それは従来の自給的現物経済ではもはややってゆけなくなったイスハ社会を現金経済へ見事に転換させる方式に他ならない。

本論文は、変化しつつあるアフリカ社会の一つのユニークな例を、きわめて明瞭に描き出し、鋭く分析を加えた力作であり、アフリカ研究に於ける新しい展開を示すものと高く評価される。文化人類学の社会変化の研究としても大変独自の研究であり、政治人類学的研究の可能性を示すものである。

すでに大きな評価を専門研究者の間で与えられている研究であり、論文博士に十分値するものであると判定する。